

インド仏教思想史

三枝充恵 (講談社学術文庫 2191) [原書 1975]

11 序章

わたくしたち—思想を専門として扱うものは、大雑把にいて、ゴータマ・ブッダが百年新しくても古くても、実のところ、それほど深刻な問題とはならない。それよりも、思想の変遷を見ることができるならば、それを持って一応満足する(もとより正確な年代が判明すれば、それにこしたことはない)。

12 インドにはまた、伝統的に、いわゆる思想の自由があった。思想の自由は、思考・言論・発表・信仰などの自由につながる。どんな異様なものも、ここでは異様でもなんでもなく、珍しくさえない。こうした人間の精神の自由を、インド人は当初から現在に到るまで守り続けてきており、その自由を、他の手段を持って威嚇し弾圧するということは、皆無といってよいほど少ない。すなわち、ここには、ソクラテスが毒杯をあおぎ、イエス・キリストが十字架にかけられ、マホメットがヘジラを余儀なくされたというような例、あるいは焚書や禁書、宗教裁判や宗教戦争といったものの、インド人のあいだには、かつて存在しない。—中略—

17 最後に、1203年、ヴィクラマシラー寺院がイスラーム軍によって徹底的に破壊されて、仏教活動はインドの地に消滅する。

53 アポリア(十四難)に対してブッダはつねに「無記」を通した。すなわち解答しなかった。—中略—ブッダは言う。

ここに私が(いずれとも)断定して説かなかったことは、断定して説かなかったこととして了解せよ。—中略—なぜ説かなかったのか。このことは目的にかなわず清らかな修行の基盤とならず、世俗的なものを厭い離れること、欲情から離れること煩悩を制し滅すること心の平安、すぐれた智慧、正しいさとり、ニルヴァーナのためにならないからである。

68 現実の根源的反省によって自己にそむき自己を自ら否定する苦の現実を時間的な最初の原点として出発し、さらに、その論理的理由と原因とを求めて無常にいたりそれを論理的な始元としてつかみ取るそれが初期仏教の法の根本である。

76 極端のことを仏教では「辺」(anta)という。—中略—

この辺には苦と楽だけではない、有と無というのも二辺である、断と常というのも二辺である。仏教はこの二辺を離れるべきことをブッダ自身の経験から得て、中道をそのスローガンとした。

185 「中論」の中心思想は、縁起-無自性-空にある。

自性とは自己存在、実体のことである。自性を無自性に転換させるのが縁起である。縁起とは相依性のことである。自己存在=自性をもたないありかたが、すなわちそのものの空ということにほかならない。

193 しかし無自性という原理にとりつかれるならばそれは曲解であり「空であるともそうでないとも説くべきではない」(22-11)のである。

- 229 ブッダは世俗のあらゆる呪術・呪文・迷信・密法などを行なうことを固く禁じまた排撃した。
「師に握拳なし」—中略—
- 230 アーリア人はなり合理主義的な思想を抱いていた。しかし彼らはインドに侵入して非アーリア人と交わり、かれらからかなりの影響を受けていった。リグヴェーダには30ほどの呪術のマントラが含まれているが、これは全体から見るとごく一部に過ぎない。アーリア文化と非アーリア文化の混淆が進行が進むにつれて作られていったサーマ、ヤジュール、アタルヴァの3ヴェーダを見ていくと最後のアタルヴァベーダの中では呪文・呪法の占める比重が非常に高い。
- 237 密教の3特徴
- (1) 秘儀・エクスタシーによる即身成仏、煩惱肯定は迷信と妥協結合して左道密教(シャクティ崇拜)に到った。
 - (2) 多数の諸仏諸尊を祭り—大曼荼羅を構成。
 - (3) 宇宙マンダラの理解を理論的抽象的ではなく具体的現実に諸芸術として表現。
- 239 密教の最終段階に、世界原因としての原初仏(アーディブッダ)の信仰があらわれた。これは明らかに有神論の影響によるものである。やがて民衆に迎合することで墮落し宗教性を失いそれがインドにおける仏教の最後の姿となった。
- 240 ヴィクラマシラーの大寺院はイクティヤール;ウッディーン率いるイスラーム軍によって、1203年わずかの遺蹟ものこさず徹底的に破壊し尽くされ財産はことごとく強奪されビク・ビクニは殺された。